慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	春日直樹・竹沢尚一郎編『文化人類学のエッセンス：世界をみる/変える』(有斐閣, 2021年)
Sub Title	
Author	牧田, 小有玲(Makita, Koure)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2021
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.91 (2021.) ,p.(67)- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000091-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：春日直樹・竹沢尚一郎編
『文化人類学のエッセンス　―世界をみる／変える』
（有斐閣，2021 年）

牧　田　　小　有　玲*
Koure Makita

本書は，文化人類学を初めて学ぶ大学生や専門課程の学生を読者として想定した，文化人類学の思考や方法論を多角的に紹介する入門書である。各章 14 のテーマから，「文化人類学とは何か」という壮大な課題の糸口を提示すること，また，文化人類学という学問を通して普段見えている世界を新たに捉え直すことを目指している。

本文の構成は以下の通りである。

序文
第 I 部　傷つきやすいものとしての人間
　第 1 章　貧困
　第 2 章　自然災害
　第 3 章　うつ
　第 4 章　感染症
　第 5 章　性愛
第 II 部　文化批判としての人類学
　第 6 章　アート
　第 7 章　人間と動物
　第 8 章　食と農
　第 9 章　自分
　第 10 章　政治
第 III 部　人類学が構想する未来
　第 11 章　自由
　第 12 章　分配と価値

*　慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻科博士課程 1 年

第 13 章　SNS
第 14 章　エスノグラフィ

序文では，本書の基本的な立場や理念が以下の 4 点にまとめられ紹介されている。「1. 世界中でグローバル化が猛烈な勢いで進行しており，日本でも世界の他のどの地域でも急速な変化が同時並行的に生じている」では，編者 2 人が 1980 年代に行っていた現地調査と比較し，現在は日本でも現地でもインターネットが普及したことであらゆる情報が入手しやすくなった状況で，文化人類学の最大の特徴とされてきたフィールドワークのあり方も大きく変化していることが指摘される。「2. それでも人類学の核心部分は相変わらず，他の人々と直接に出会う経験としてのフィールドワークであり続ける」では，フィールドワークは不要になったわけではなく，異質な他者とぶつかりながら彼らの判断や理解を学んでいく必要性が提示される。「3. フィールドワークの根底にあるのは他者と直接的に向かい合うことであり，文化人類学では困難や苦しみを抱えながら生きている人々への関心が大きな位置を占めるようになっている」では，文化人類学のこれまでの歴史を概観し，調査対象が 1980 年代までのそれとは変化してきたことが指摘される。具体的には，グローバル化に伴い広まった新自由主義が生み出した貧困や短期雇用の問題，また冷戦の終了を経て民族紛争や宗教対立が激化し，そこで生まれた難民問題などが焦点化されていくようになる。「4. 世界各地で生じている困難の多くは，社会経済的なだけでなく文化的な問題であり，文化人類学は人々がそれらの問題にどのように対処しているかを知ることで，困難の克服に貢献しようと努める」では，自らが自明とする文化論的な観点に批判的になりながら様々な苦難が生み出される世界のあり方を捉え直すことの必要性が提示される。同時に，そうした苦難を乗り越える多様な実践に着目し，「明日を切り開く」可能性を示唆している。

第 I 部「傷つきやすいものとしての人間」では，序文で指摘したような，苦難に直面する人々を対象とした近年の潮流を反映させた 5 つのテーマから，他者との文化的な差異を理解するだけでなく，現代的な問題を含む苦難や，その状況を理解することを目指している。第 1 章「貧困」では，大阪のホームレスと西ティモールの人々の貧困を比較し，貧困の多様さを提示する。われわれの「お金がない」状態は市場経済の中で経済的余裕のなさから生まれる社会的な不安や苦痛に接続しうるものであるが，西ティモールの人々の「お金がない」状態は市場経済と結びつくことがなくそれ以上の意味を持ちにくいことから，貧困のあり方は根本的に異なる。そのため，貧困という抽象的な問題を一挙に解決しようとする姿勢を批判する。第 2 章「自然災害」では，東日本大震災とインド西部地震後の女性の手仕事を事例に，具体的な語りを取り上げながら社会的課題を乗り越えていく人々の姿を描き出す。宮城県による雇用創出を目的とした手仕事は，インドと違って経済的自立には叶わなかったものの，少額であっても収入があることや，目の前にするべきタスクがあることは結果的に彼女たちの精神的苦痛の軽減につながることが指摘された。第 3 章「うつ」では，現代日本におけるうつ病の事例を取り上げ，前近代から現代の社会的変遷を辿る。身体の健康を向上させようとする「健康主義」を経て，現代では心と脳を監視し，さらには改善しようとする「新健康主義」の動きがあることを示し，その先にあるのは監視による抑圧的な社会なのか，真に配慮的な社会なのかという問題提起がなされている。第 4 章「感染症」では，世界中で現実的問題ともいえる COVID-19 の事例を取り上げ，過去の感染症を参照しながら生物学的特徴と社会的状況の両者に着目するバイオソーシャルの視点の重要さを提示する。また，感染症の存在を取り込んだ社会を見る際，その構造は支配–自由という従来の二項対立図には還元できず，アネマ

リー・モルの提示する「ケア-ネグレクト」など，新たなバイオソーシャルな参照軸が必要であることを示す。第5章「性愛」では，ポリアモリーやモノガミーの事例を取り上げながら，多様な性愛の形があること，性愛とは他者（愛する人）との相互交渉であることが指摘される。傷つきやすさを抱える自己と他者との共生は，多様性を孕む現代社会にも適応されるもので，異なる特性，属性の持ち主の他者でも無関心にならずに理解する必要性を説明する。

第II部「文化批判としての人類学」では，第I部で検討したような「傷つきやすいものとしての人間」が直面する苦難や困難が，どのような世界のもと生み出されているのかという点を明らかにすることを目的としている。その上で，われわれの意味世界を自明のものとしている前提を批判的に見るべきであるとする。第6章「アート」では，国内外のアート実践を事例に，アートを介して複数のイメージや現実が結びつく可能性を示している。現実では関係がないものや，矛盾や対立さえするものが，アート実践という第三者を通じて有縁性をもち，その関係自体が変形していくことを提示している。第7章「人間と動物」では，かつて象徴的・唯物的にしか捉えられてこなかった動物が，人間に影響を与え，また与えられる存在であることをマンガで描いている。人が動物を一体視するシベリア狩猟民族ユカギールの事例，人が鳥の視点を読み込み狩猟の道具とするボルネオ島狩猟民族プナンの事例などを通して，彼らの構築する世界の中には動物が重要な立ち位置にいることが示される。第8章「食と農」では，日本で農薬や化学肥料を使わない有機栽培の野菜の生産量が低いのは経済的・政策的背景があることを指摘し，われわれの食という行為は少なからず政治的であることが示される。食べることは，自然の中で生まれる食物を体内に取り入れるということであり，人間は自然に満たされた存在であるために，食物の種類や手段の方法，共に食べる人などまで関心をもつことが重要であると指摘する。第9章「自分」では，「自分」という概念がこれまでの文化人類学で大きく取り扱ってこなかったことを指摘しながら，自閉スペクトラム症の人々と，パプアニューギニアの諸地域の人々を事例に，自分のあり方を捉え直すことを試みている。自閉スペクトラム症の人々は，感情や気持ちの観念を理解できないとされているが，そもそも私たちが共有している感情や気持ちという観念は，本来知覚し得ない可能性があることを示唆する。そしてそれは，パプアニューギニアの人々が知覚不可能な領域（霊魂）を意識することと同じであることを提示する。第10章「政治」では，人々のあいだの多様な差異から生まれる対立を調停・解決する営みとしての政治に注目するにあたり，アフリカの合意形成のプロセスや対立の解決方法の事例を取り上げる。そこでは，「ともに生きる」ことをめざした試みがみられ，共同性や共生を積極的に作り上げていく姿が紹介される。われわれの「常識」を再考し，差異による対立を乗り越えるための最適な見方として，文化人類学の知があると結論付けている。

最後に第III部「人類学が構想する未来」では，人々が苦難や困難を乗り越え，「明日を切り開いていく」可能性を提示するテーマを取り上げている。第11章「自由」では，われわれの持つ自由という概念の捉え直しを図る。他者との結びつきを否定して自由になるか，また結びつきを受け入れて自由をあきらめるか，という二者択一ではなく，ヌアーの人々や北米先住民の助け合いや医療現場でのケアの実践を事例に，他者との結びつきを認めながらも自由になることの可能性を提示する。第12章「分配と価値」では，人が生きるのに必要な生産物を手に入れる条件は何かという問題提起から，生きることの価値を問うている。南アフリカの豊かさと雇用が直結しない事例を挙げ，われわれにも生産物に対する正当な分け前を全員が入手するような「新しい分配の政治」が必要であるというファーガソンの議論を取り上げ，家父長制が終わった後の自由で公正な社会の可能性を示唆している。第13章「SNS」では，

インターネットの出現から現在のSNSへ至るまでの過程を概観し，SNSが生み出した新たな自由と新たな不自由を明らかにする。以前から存在する電子メールや電子掲示板などのオンラインコミュニケーションが仮想／現実の二分法で捉えられうるものであったのに対し，SNSにおける発話はその二項対立図に還元できないもので，多様性を促進する自由さを持つ反面，標準化に対応しなければならないという不自由さもあることが指摘される。第14章「エスノグラフィ」では，文化人類学の最大の特徴であるエスノグラフィが，ICTの活用を通して変容を遂げる可能性が示唆される。これまで通りの参与観察は意義を失わないとしながらも，ICTによってエスノグラフィをより開かれたものへと移行していく試み（「Open Anthropology Cooperative（OAC）」など）や，言語・映像・音声とリンクさせた「マルチモーダルな（視覚・聴覚などの身体感覚の情報を組み合わせた）」エスノグラフィなどを紹介する。ICTが切り開く新たなエスノグラフィの形は，現地の実践と学問の知的刷新を交錯させうるものとして人類学の今後の展望としている。

以上のように本書は，14のテーマから人類学の最新の議論や今後の展望・課題を含めながら，読者に自明としているものを疑う契機を提供している。本書にはいくつかの意義と可能性がある。1点目は，本書が想定している読者にとって，本書で取り上げる14のテーマは非常に身近でリアリティのあるものであり，人類学的な視座を得るに大きなインパクトを与えられるという点だ。中でも第3章「うつ」では，電通の高橋まつりさんの自殺の件が取り上げられているが，数年後に就職を控えた大多数の大学生にとっては少なからず当事者意識があるはずである。まだ第4章「感染症」の一大テーマとなっている新型コロナウイルス感染症は，誰しもの生活に何らかの制約や影響を与えている状況が現在も続いている。このように，極めて読者に身近なテーマを取り上げていることは，従来の教科書や論集とは異なる特徴だと言えるだろう。「文化人類学という学問のおもしろさと価値を伝えたい」本書の目的を限りなく達成しやすくしているはずである。一方で，本書は入門書でありながらも文化人類学の基本的な理論や潮流が詳細に紹介されているわけではない。序文でも，「本書がめざしているのは，文化人類学の基礎的な考え方を伝えることではない」と断っているとおりであるが，そこには多少の不安が残る。これまで人類学が培ってきた，民族や戦争，家族，宗教，ジェンダーなど，大きな枠組みからの検討がないことは，文化人類学の入門書としては心もとない感覚を評者は覚えた。グローバル化が進んだ世界で，人々がどこにいても同じような問題に直面する可能性があり，複数の現実的課題から人類学の可能性を吟味していることは重要であるが，それ以前の定点的な地域内部の研究の成果を読者に提示する必要があるのではないだろうか。他方で，各章末にはブックガイドでより詳細な議論を紹介し，参照資料の一読を促していることから，読者は本書から出発し，文化人類学の多様な議論にアプローチする機会を得られることは間違いない。本書で取り上げられたテーマは，学界でもまさに現在進行形のホットトピックであると言え，そうした最新の議論を，より多くの人々をターゲットとして「わかりやすく」伝えていく営為は今後も期待されるところであろう。

2点目に，第Ⅰ部のタイトルでもあり，本書の大きなテーマの1つとなっている「傷つきやすいものとしての人間」への「共感」に基づいたスタンスも，これまでの教科書や論集とは異なる新しい特徴の1つであると言える。ジョン・デービスが「苦難の人類学」の必要性を説き，シェリー・オートナーが1990年代から現代の社会的問題を焦点化してきた一連の流れを「暗い人類学」と表現したように，現代を生きる誰もが被傷性を抱えた存在であることは指摘の通りである。他方で，被傷性に対する共感を検討した際に，共感は人類学者にとって必要なものであるかどうか，また，そこでの共感とは何かという

根本的な疑問が残る。序文には，「人類学者は苦難や困難を抱える他者に感情移入するのではなく，他者に共感する自分を客観視することで，彼らと私たちが置かれている世界の状況とそこに生きる困難とを理解しようと努める」とある。つまり，人類学者が調査対象者に対して抱く（べき）共感は感情移入や情緒的同一性ではなく，重視するべきは自己の共感を通して問題の社会的構造や自らと彼らの違いに着目するプロセスであるとする。一方で，人類学者の共感が，彼らの属する集団が善とする価値観，つまり集団の規範を無意識に内面化した感情である可能性もある。そうした共感は，さらに集団の規範を強化する可能性を持ち，また人類学者は共感によって当該集団の構造的な問題点を見落としてしまうこともあるのではないだろうか。本書では「共感」をどう扱うかという具体的な方法については明示されていないが，現代的問題を通して「傷つきやすさ」や「共感」を考えるきっかけを十分に与える良書であることは言うまでもない。今後のさらなる議論が期待される。